ふれあうナカマ　育む　見守る　ちょっと近くない？

学校は地域と共に歩んでいます。宮城県内の小中学校の様子、自慢できることを、児童・生徒が紹介します。

えっ？　育む　見守る　ふれあうナカマ

わが校 わがまち スクール通信

根白石小　迫力あるおはやしと披露

これがイチオシ
大事にしたい木造校舎

根白石小学校は仙台市唯一の木造校舎です。コンクリートにない自然の色に囲まれて、気持ちよく学校生活を送っています。校舎は1930年（昭和５年）にできました。95年がたっていて木の温かさも感じられます。

そんな根小のおすすめスポットは、中央玄関です。校舎を正面で見たときに学校の中心に見え、根小のシンボルのような存在です。地域の人もずっと大切にしてきました。これからもこの木造校舎を大事にしたい、という気持ちで毎日を過ごしています。

学校名　仙台市立根白石小学校
所在地　仙台市泉区根白石杉下前15
創　立　1873年
電　話　022(379)2417
校　長　内田　和未
児童数　160人

誇りに思う「アセ踊り」

根白石小学校は、地域で踊り継がれてきた「アセ踊り」に取り組んでいます。踊りができたのは今から100年以上も前のことです。2人で向かい合って踊るので、元々は「合わせ踊り」と言われていたものが、いつしかアセ踊りと言われるようになったそうです。

当時は生活が豊かではなかったので、みんなで月々お金を出し合い、地区から交代でお伊勢参りをしたそうです。そんな旅の途中で出会った人々から教わった踊りを、根白石に持ち帰ったと伝えられています。

現在、根白石小の5、6年生はおはやしと踊りに分かれ、アセ踊り保存会の方々と年7回練習を行い、年2回披露しています。卒業の前には、6年生から4年生に踊りやおはやしを教え、伝統を引き継いでいます。

おはやしは迫力があり、踊りときれいにそろうことで、盛り上がります。本番で披露するときには赤と白の化粧をして踊ります。おはやしと踊りが合わさった瞬間、根白石小が誇るアセ踊りが完成します。

「アセ踊り」を披露する児童たち

編集委員　五十嵐陽太、岩淵丞太郎、永澤紡希、森合悠（６年）
木村一翔、鈴木煌賢、斎藤えれな（５年）指導教員　奥寺桜花　佐藤智徳

次回は
舘矢間小（丸森町）
浅水小（登米市）

築館小　笑顔・歓声 交流も生まれる

最大行事「子ども祭り」

築館小学校には、児童会活動最大の行事「栗の実子ども祭り」があります。5・6年生が自分たちでどんなお店にするか、考えて出店し、1～4年生が出店を回って楽しみます。的当てやボーリング、迷路やゲームなど、毎年アイデアいっぱいのお店が登場します。

上級生は「どうすれば下級生がもっと楽しめるか」と話し合い、道具を作ったり、看板を飾ったりと、みんなで力を合わせて準備を進めます。

当日は、参加者が楽しめるようルールを説明したり、景品を渡したりしながら、安全にも気を配っています。校内には笑顔や歓声があふれ、まるで小さな遊園地のようです。

昨年度は、計画委員会が考えた「築ちゃん・築くんを探せ」という企画もあり、友達と協力してキャラクターを探す姿が見られました。祭りの後には、下級生が上級生に感謝の手紙を書くなど、交流も生まれています。

全校児童が協力して作り上げるこの祭りは、築館小を笑顔と感謝で包む大切な伝統行事です。

校内に笑顔があふれる「栗の実子ども祭り」

編集委員　佐藤琉羽、髙橋澪央、荒川結愛、尾崎結都、山田祐慶、
植松航、鈴木まい（６年）指導教員　千葉直人

これがイチオシ
あいさつで気持ちよく

築館小学校では、よりよい学校生活を送るために「あいさつ運動」を行っています。朝から「おはようございます」の声が響き、あいさつを交わすと心も体も元気になり、１日を気持ちよく始めることができます。

低学年児童のあいさつに笑顔が生まれ、先生方も車から元気にあいさつを返してくれます。あいさつ運動を通して、自分からあいさつする意識が高まり、学校全体が明るくなりました。

これからも笑顔と元気な声があふれる学校にしていきたいです。

学校名　栗原市立築館小学校
所在地　栗原市築館薬師１の６の１
創　立　2017年
電　話　0228(22)1131
校　長　高橋　和宏
児童数　434人

子ども×ニュース　河北新報から

戦時下の暮らし知る

大崎・鹿島台小で出前授業

地元住民が物語で紹介

大崎市鹿島台の住民でつくる「鹿島台歴史研究会」は、同市の鹿島台小（児童431人）で戦争体験を伝える出前授業を開いた。6年生74人に、1945年8月に旧鹿島台村であった空襲や当時の暮らしぶりなどを紹介した。

研究会は2007年から同校で授業を続ける。今年は空襲の記録をまとめて昨年3月に発行した「鹿島台にも空襲がやってきた」を基につくった物語を紹介。手描きの絵を画面に映し出し、メンバー9人が登場人物のせりふなどを読み上げた。

太平洋戦争が激しさを増す中、夜は空爆に備えて電灯を黒い布で覆って生活していたと、戦時下の暮らしを説明。1945年8月9～10日には鹿島台上空に英軍の艦載機4機が飛来して鹿島台駅周辺が機銃掃射され、男性2人が犠牲となったと伝えた。

児童からは「一億総玉砕とはどういう意味か」と質問があった。45年3月の東京大空襲を経験した佐藤守良さん（97）＝大崎市＝は「死ぬ気で戦えという意味だが、ひどい言葉だった。悲惨な戦争は起こしてはいけない」と当時を振り返った。

授業を受けた遠藤陽乃さん(12)は「戦争という言葉は知ってはいたが、改めて恐ろしいことだと分かった。当たり前に生きている意味を考えたい」と話した。

出前授業は14日に実施。児童らは授業後、学校そばの上戸公園に移動し、旧満州（現中国東北部）開拓に従事して犠牲となった鹿島台出身者の名前を刻んだ拓魂碑を参拝した。

（1月21日朝刊より）

拓魂碑の前で説明を受ける児童

河北新報の仕事　がんばった

仙台市スチューデントシティ支局員紹介

「スチューデントシティ」は、仙台市内の小学5、6年生が仕事をして給料をもらい、買い物や納税をする「小さな街」です。河北新報社は、紙面編集などの仕事を体験する支局を開設しています。

北仙台小6年（1月16日）

袋原小6年（1月20日）

燕沢小6年（1月14日）

七北田小6年、野村小6年（1月15日）